

マルクス・エンゲルス選集

第十三卷

バクーニン主義者の活動

ロシアの社会関係

家族、私有財産および国家の起源

国家論
ロシア社会論

マルクス=エンゲルス選集

第 13 卷

マルクス・レーニン主義研究所編

ロシア国家社会論

大月書店刊

マルクス＝エンゲルス渾集

一九五四年七月十五日 発行

第十三卷

定価 四二〇円



編集者

マルクス・レーニン主義研究所

発行者

小林直衛

印刷者

三晃印刷株式会社

発行所

東京都文京区
本郷一丁目一五番地

大月書店

電話 小石川(92) 三〇九一
七八八七番
振替・東京 一六三八七番

三晃印刷・田中製本

凡 例

一 原註は（原註1）と、異文考証等についての編集者（訳者）による註は*印で標示し、その註釈文はそれぞれ註を必要とする個所の直後に、訳者による註は（1）（2）等と標示し、その註釈文は（註1）（註2）等として各論文、手紙の末尾に一括し、なお簡単な訳註は「……」として六号活字で本文中に挿入した。原文にある挿入句は（……）で挿入した。

二 原文で一般的に使用されている國語以外の原語は、原則としてその訳語の直後に（……）で挿入した。

三 引用文は「……」で、引用文中の再引用箇所は『……』でしめた。

四 著書、新聞、雜誌その他の出版物の書誌名または著作題名等は『……』でしめた。

五 原文中斜字体または隔字体イタリックになった個所は、訳文ではゴチック活字または傍点をつけて標示した。

六 地名、人名はなるべく現地の発音にちかく表記することを原則としたが、従来の慣用をも考慮した。

七 手紙は主題に関係ある部分の抄訳にとどめ、文調も手紙であることに格別の考慮をはらってはいない。

八 本選集の訳文は、それぞれの訳者が担当し、校訂者によって原典と各國語訳とを逐語的に参照し、内容上と用語用上との校訂がなされ、文調にも一應の統一がはかられたうえ、なったものである。

目次 第十三卷

無政府主義との闘争

政治的無関心主義 (マルクス).....	一
『フォルクスシュタート』編集部への手紙 (エンゲルス).....	一〇
インタナショナルから (エンゲルス).....	一四
バクーニン主義者の活動 (エンゲルス)	
——一八七三年夏のスペインにおける暴動にかんする覚書——.....	二〇
権威原理について (エンゲルス).....	四八
イタリアから (エンゲルス).....	五三
付 『ペルリナー・フォルクストリビューネ』編集部への手紙 (エンゲルス).....	六〇

ブランキー派批判

ブランキー派コンミュン亡命者の綱領 (エンゲルス)	六五
---------------------------------	----

ポーランドの運動

ポーランド人の宣言書 (エンゲルス)	七七
ポーランドのために (マルクス、エンゲルス)	八八
一八三〇年のポーランド革命五十周年記念のためもおされた ジュネーヴの集会へ (マルクス、エンゲルス)	九四

ロシア問題

亡命者文献 一 (エンゲルス)	九七
亡命者文献 二 (エンゲルス)	一二三

ロシアの社会関係 (エンゲルス).....	一二九
『ロシアの社会関係』へのあとがき (エンゲルス)	一五一
『フォルクスシュタート』からとつた國際問題論集』への序文 (エンゲルス).....	一七一
『フペリョート』編集者への手紙 (マルクス)	一七六
『祖國雜記』編集部への手紙 (マルクス)	一七八
ヴェラ・ザスリツチへの手紙 (マルクス)	一八三
一八八一年三月二十一日のパリ・コンミュン記念 スラヴ人集会へ (エンゲルス).....	二一七
ロシア問題にかんする手紙から	
一 マルクスからエンゲルスへ (一八六八年十一月七日).....	二一九
二 マルクスからエンゲルスへ (一八七〇年二月十日).....	二二〇
三 マルクスからエンゲルスへ (一八七〇年二月十二日).....	二二三
四 マルクスからゾルゲへ (一八七七年九月二十七日).....	二四四

五	マルクスからダニエルソン（ニコライーオン）へ（一八七九年四月十日）……………	二六
六	マルクスからダニエルソン（ニコライーオン）へ（一八八一年二月十九日）……………	二七
七	エンゲルスからマルクスへ（一八八二年十二月二十二日）……………	二八
八	エンゲルスからダニエルソン（ニコライーオン）へ（一八九二年九月二十二日）……………	二九
九	エンゲルスからダニエルソン（ニコライーオン）へ（一八九三年二月二十四日）……………	三〇
一〇	エンゲルスからダニエルソン（ニコライーオン）へ（一八九三年十月十七日）……………	三一
一一	エンゲルスからザスリツチへ（一八八五年四月二十三日）……………	三二

家族、私有財産および國家の起源（エンゲルス）

序文

一	一八八四年の初版に……………	三五
二	一八九一年の第四版に……………	三五

第一章	先史時代の文化段階	二七六
第二章	家　　族	二八五
第三章	イロクオイ人の氏族	三五六
第四章	ギリシヤ人の氏族	三七八
第五章	アテナイ國家の成立	三九三
第六章	ローマの氏族と國家	四〇七
第七章	ケルト人およびドイツ人の氏族	四二三
第八章	ドイツ人の國家形成	四四四
第九章	未　開　と　文　明	四五九
あらたに発見された群婚の一例（エンゲルス）		四八六

無政府主義との闘争

政治的無関心主義（マルクス）

——『アルマナッコ・レブリカーノ』一八七四年版所載——

1 政治的無関心主義

労働者階級は政党をつくってはいけない。どんな口実でも政治行動をくだしてはいけない。なぜなら、國家にたいして闘争をおこなうことは、國家をみとめることを意味するからだ。そしてこれは、永遠の原理に矛盾する！ 労働者はストライキをやってはいけない。なぜなら、労賃の値上げを強要したり労賃の値下げに反対するためにたたかうことは、賃労働制をみとめることを意味するからだ。そしてこれは、労働者階級の解放という永遠の原理に矛盾する！

労働者が譲歩をかちとるためにブルジョア國家にたいする政治闘争において團結すれば、彼らは妥協をするこ
とになろう。そしてこれは、永遠の原理に矛盾するだろう！ だから、イギリスやアメリカの労働者がそれをや

ろうという悪習をもっているような政治運動はすべて排斥されなければならぬ。労働者は、労働日の法律的限制を達成するために精力を浪費してはいけけない。なぜなら、それは企業家との妥協を意味するからだ。企業家は、場合によっては十四時間ないし十六時間のかわりに、たった十時間ないし十二時間、労働者をしばらくあげることのできるのだ。同様に彼らは、十才未満の少女の工場労働の法律禁止をかちとるためにほねをおってはいけけない。なぜなら、こういう手段では、十才未満の少年の搾取は、まだ廃止されないからである。それもやはりあたらしい妥協をむすぶことを意味する。そしてこれは、永遠の原理の純粹性をけがすことになるう！

労働者がなおいっそ要求してならないのは、合衆國でおこなわれているように、國家が、すなわちその予算が労働者階級の搾取にもとづいている國家が、労働者の子弟のために初等教育を保証する義務をおえということ并要求してはいけけない。なぜなら、初等教育はまだ普通教育ではないからである。男女労働者が國立学校の一教師からおしえてもらうよりも、むしろ読み書きや計算のできないほうがましである。永遠の原理がやぶられるよりも、無知と毎日十六時間の労働とが、労働者階級を愚昧にしておくほうが、はるかにましである！

労働者階級の政治闘争が革命的形態をとれば、つまり労働者がブルジョアジーの独裁のかわりに彼ら自身の革命的独裁をもつてすれば、彼らはおそろしい原理侮辱罪をおかすことになる。なぜなら、彼らのあわれなつまらぬ日常要求を満足させブルジョアジーの抵抗をぶちやぶるために、彼らは、武器をすて國家を廃止することのかわりに、國家に革命的な過渡的な形態をあたえるからである。労働者は労働組合をつくってはいけけない。なぜなら、それは、ブルジョア社会に存在する社会的分業を永遠化することを意味するからだ。しかも労働者を分裂させるこの分業こそ、げんに彼らの奴隸狀態の基礎をなしているのだ。

一口でいえば、労働者は手をこまぬいておれ、政治運動や経済運動に時間をつぶすな、というのである。これらの運動はすべて直接的結果以外のなにものをももたらさぬ。彼らはほんとうに信心ぶかい人として、日常要求を軽蔑しながら、信心ぶかくこうさげなければならぬ。「永遠の原理にけがれさえなくば、わが階級を十字架にかけたまえ、わが種族を滅亡せしめたまえ！」信心ぶかいキリスト者のように、彼らは牧師の言を信じ、この世の財貨をかるんじ、ただ天國にいたることだけにつとめなければならぬ。彼らが天國のかわりに社会的清算——いつか天氣のいい日に、どこかこの世の片隅におこるのださうだ、しかしどうしてだれがそれを実現するかはだれもしらない——とよみかせたところで、そのごまかしにはなんのかわりもない¹⁾。

この評判の社会的清算なるものをあてにして、労働者階級は、みちたりた一群の羊のように行儀よくして、政府をそっとしておき、警察をおそれ、法律をおもんじ、文句をいわずに大砲の餌食にならなければならぬ。

毎日の生活では、労働者は、國家のもっとも恭順なしもべでなければならぬ。しかし心のなかでは、國家の存在にせいっぱい抗議し、國家廃止論のパンフレットを購読することによって、國家にたいするふかい理論的輕蔑をしめさなければならぬ。彼らは、にくむべき資本主義的秩序が解消する未來社會にかんする大言壯語以外には、この秩序に反抗しないように氣をつければならぬ！

もしも政治的禁欲主義の使徒たちが右のようにはっきりといいあらわしたならば、労働者階級は、たちまち彼らを地獄へおいやり、それらすべてをば、空論を事とする數人のブルジョアや零落した地主貴族による惡口としてしか考へなかつたであらうことはあらそうまでもない。彼らは労働者階級にどんな現実的闘争手段をも拒否するほどおろか、いやかしこいのである。というのは、こんにちの社會では、これらすべての闘争手段をとらなけ

ればならず、またこの闘争の宿命的な諸條件は、不幸にも、わが社会科学博士たちが自由、自治、無政府という名で女神として説いた、あの観念論的な空想とは一致しないからである。しかし労働者階級の運動はいまでは大いにつよくなっているのです、彼ら博愛主義の宗徒たちは、政治の領域でたえず宣言している例の偉大な眞理を経済闘争にかんしてくりかえすだけの勇氣をもたなくなっている。彼らは、この眞理をストライキや團結や労働組合や婦人幼年労働法や労働日規制法などに適用するには、あまりに臆病である。

吾々は、彼らがどの程度まで旧來の傳統に、廉恥心に、誠実性に、永遠の諸原理をひきあいにだせるものか、しばらく靜観することにしよう。⁽²⁾

最初の社会主義者たち（フーリエ、オーウェン、サン・シモンなど）が——労働者階級に政党としての結成を可能ならしめるほどに社会關係が發展していなかったため——未來の理想社会の叙述にとどまって、労働者が自分の狀態をいくらかでも改善するためにくだるいっさいのころみ、たとえばストライキや團結や政治行動を非難したのは、やむをえないことであつた。しかし吾々が社会主義のこれらの古老たちを否認する權利のないのは、現代の化学者たちがその祖先たる錬金術師を否認する權利のないのとおなじであるにしても、吾々はむかしのあやまりにあともどりしないように氣をつけないければならぬ。なぜなら、いま吾々がくりかえすならば、それはゆるしがたいことであらうから。

にもかかわらず、ずっと後年になって——政治的・経済的闘争がイギリスですでにひどくきわだった性質をおびるようになった一八三九年において——ブレイ⁽³⁾、すなわちオーウェンの学徒で、ブルードンにさきだつて相互扶助主義を発見した人々の一人であるブレイは、『労働の苦悩と労働の救済』という一書をあらわした。

現在の闘争によって達成しようとしているあらゆる救済策が無効であることを論じた一章のなかで、彼は、イギリス労働者階級の政治的ならびに経済的運動のすべてにたいして辛辣な批判をあびせている。彼は、政治運動やストライキや労働日の短縮や婦人幼年工場労働のとりしまりを非難しているが、その理由は、彼の考えでは、それらすべてのことが、労働者をこんにちの社会状態から脱出させないで、これにしばらくつけ、社会の諸対立をなおいっそう激化させるばかりだからである。

そしていまや吾々がお目にかかるのは、わが社会科学博士中の託宣者ブルードンである。この先生は、彼の相互扶助主義という救世的理論に矛盾したあらゆる経済運動（團結、ストライキ等）に極力反対しおおせたにもかかわらず、彼の諸著作や直接的参加によって労働者階級の政治闘争を促進したのであるが、彼の弟子たちは、この運動に公然と反対することはあえてしなかった。先生の大著『貧困の哲学、別名経済的諸矛盾の体系』が出版された一八四七年に、私はすでに、労働運動にたいする彼のあらゆる詭弁を論駁しておいた。⁽⁴⁾ところが一八六四年、オリヴィエ法が、はなはだ限定された程度ではあったが、フランス労働者に團結権を保証したあとで、ブルードンは、彼の死後数日たって発表された一著作——『労働者階級の政治的能力』（一八六五）——のなかで、ふたたびこの同一論題にたちもどっている。

先生の攻撃はブルジュアジーの御意になかったので、『タイムズ』紙は、一八六六年のロンドンの裁縫工の大ストライキにさいして、ブルードンに敬意を表してこれを翻譯し、ブルードンそのひとのことばで争議団員を非難した。以下二三の見本をお目にかけよう。

リーヴ・ド・ジエの炭坑夫がストライキにはいり、軍隊が彼らの頭に理性をつめこむために急行した。

「リーヴ・ド・ジエの炭坑夫を射殺させた当局は、不幸な境遇のなかにあった。しかし当局は父親としての氣持と執政官としての義務との相尅のなかで共和國をすくうためにみずからの子供を犠牲にしないわけにはゆかなかつたブルートゥスのように行動した。ブルートゥスはためらわなかつた。そして後世の人はそのことを理由にして、あえて彼をせめようとはしなかつた。」

どんな労働者も、かつてブルジョアが、みずからの利益をすくうためにその労働者を犠牲にすることをためらつた、などということをおぼえているものはなからう。いったいブルジョアとはどんなブルートゥスなのか！

「いや、團結権というものが存在しないのは、強請権、詐欺権、掠奪権というものが存在しないのと同様である。」「

愚昧権というものはたしかにある、といわずにはいられない。

だがこの先生は、永遠の原理の名で惡魔退散のちんぷんかんぷんの呪文をとなえているが、その永遠の諸原理とはいったいどんなものか？

永遠の原理第一号。「労賃の高さが商品の價格を決定する。」

経済学のことなどはなにもしらず、また偉大なブルジョア経済学者リカード⁽⁵⁾が一八一七年出版の著書『経済学の諸原理』のなかでこの傳來の謬説を終局的に論駁したことをしらないものでも、イギリスでは他のいかなるヨーロッパ諸國におけるよりも労賃が相対的に高いにもかかわらず、他のいかなる國よりも安い價格でその商品を賣ることができる、イギリス工業の意味ぶかい事實はよくしっている。

永遠の原理第二号。「團結をゆるす法律は、あくまでも反法学的、反経済学的である。それは、どんな社会に

もどんな秩序にも矛盾する。」一口でいえば、「それは経済上の自由競争権に矛盾する。」もし先生が國民的範圍に局限されることがもつとすくなかったら、つぎのように自問されたであらうに。すなわち、もう四十年もまえに、経済上の自由競争権にあんなにも矛盾する一法律がイギリスで発布されたのはどういうわけであるか、工業が発達するにつれて、「どんな社会にもどんな秩序にも矛盾する」この法律が、まるで鉄の必然性のようにあらゆるブルジョア國家におしこまれていったのはなぜであるか、と。彼はおそらくつぎのことを発見したであらうに。すなわち、この権利（頭文字を大文字でかいた「権利」）は、ブルジョア経済学の無知ななかまによってかかれた経済学教科書、つぎのような珠玉の句をもふくんでいる教科書のなかにさえみいだされるということ。珠玉の句とはこうである、「財産は……労働の果実である。」ただし、他人の、とつけくわえることはわすれている。

永遠の原理第三号。「労働者階級をいわゆる社会的蔑視からひきあげるといふ口実で、まずはじめにブルジョア階級全体、すなわち親方や企業家や工場主や市民に、十把ひとからげの非難がくわえられるであらう。中間階級出のあのおそろしいとらえどころのない裏切者をさげすみにくむために、手工労働者の民主主義が呼号されるであらう。法律的強制よりも商工業上のたたかいが、國家警察よりも階級闘争が重視されるであらう。」

いうところの社会的蔑視からの出口を労働者階級にたいしてとざしてしまつたために、この先生は團結を非難する。團結こそは、工場主、企業家、ブルジョアという尊敬すべき部類の人々にたいして、労働者階級を敵対的階級として対立させるところのものであり、ブルジョアこそは、ブルードンのいうとおり、たしかに階級闘争よりも國家警察を重視するところのものである。この尊敬すべき階級をあらゆる不快なことからまぬかれさせるため

に、しんせつなブルードンは、相互扶助主義の社会が出現するまで、労働者たちに、自由すなわち競争を推奨する。これは、その大きな弊害があるにもかかわらず、しかもなお「吾々の唯一の保証」をなすところのものである。

先生は、自由すなわち競争を、吾々の唯一の保証を確保するために経済上の領域で無関心主義をとく、弟子たちは、ブルジョアの自由すなわち彼らの唯一の保証を確保するために、政治上の領域で無関心主義をといた。もしもおなじく政治的無関心主義をといた初期のキリスト者たちが、みずから被抑圧者から抑圧者にかえるために、皇帝の力づよい手を利用したとすれば、政治的無関心主義の現代の使徒たちは、彼らの永遠の諸原理が、この世の快樂とブルジョア社会のかりそめの諸特権とを抑止することをも、彼らに課するものであることは、まったくこれを信じていないのだ。それはともあれ、吾々はいわずにはいられない。彼らはキリスト教殉教者にふさわしい禁欲主義をもって、工場労働者には重荷となっている十四時間ないし十六時間労働をがまんしているのである、と。

—— ロンドン 一八七三年一月 ——

(註1) イタリアのパターニン派は一八七二年九月の國際労働者協会ハーグ大会に代表をおくらなかった。彼らはすでに八月にリミニで協議会をひらき、総務委員会への協力をいっさい拒否した。そのときの決議をあてこすっていているのである。

(註2) これもやはり恥しらずの歪曲、誠意のない欺瞞をもとにした告発にたいするあてこすりである。